

素晴らしい須走を知りたい！

「すばらしい隊」養成講座 第6回講座概要

第1部：座学 富士山が美しいのはなぜ？須走の景観を考える

■日時

令和3年12月4日（土）9時～12時

■場所

須走地区コミュニティセンター

■講師

○伊藤 光造 NPOくらしまち継承機構 理事長

■講義概要

1. 富士山の世界遺産

世界遺産とは？

－ユネスコの世界遺産条約に基づいて世界各国で自然、文化的な観点からすばらしい所が指定される。

2012年3月現在、189か国、962件。今年の世界遺産委員会が終わった時点で1154件。200件ほど増えている。

富士山の価値、評価基準

－日本で色々な所が世界遺産登録されているが、富士山の世界遺産登録は平成25年6月に文化遺産として登録された。世界遺産登録は、「信仰の対象」と「芸術の源泉」。この二つの観点から優れた価値を持つという事で指定されている。評価基準が10項目位あるが、その中で、評価基準(iii)「富士山信仰」という山岳に対する固有の文化的伝統を表わす証拠がある。富士講や須走富士浅間神社が該当する。評価基準(iv)の「世界的な「名山」としての景観の顕著な事例」。富士山の山そのものが美しいという事。評価基準(vi)顕著な普遍的意義を持つ芸術作品との直接的・有形的な関連性。富士山をテーマに文学や絵画に取り上げられて、色々な有名な作家さんの作品が作られてきている。三つの視点から富士山は素晴らしいという事で世界遺産登録された。

－特に景観に関しては、評価基準(iv)「世界的な「名山」としての景観の顕著な事例」。ここが富士山の景観の良さを評価している証。逆にそれらを保っていかないと世界遺産登録から外される懸念もあるということ。今までの世界遺産登録の事例を見ると、状況が変わり、価値を保てな事になると世界遺産登録抹消ということもあった。景観については意識をしていかないといけない。

構成資産

－構成資産の中身は、構成資産リストがある。須走に関連するものは、1-4須走口登山道、6富士浅間神社（須走浅間神社）。

－世界遺産登録を契機に、7、8年前に静岡県の景観、特に富士山周辺の景観について注目を集めた。景観などの保全措置がないと世界遺産に登録されないので、イコモスの世界遺産委員会の外国人委員が日本に来て、この周辺を見てまわり、チェックした。富士山景観についての行政のみなさんの認識がかなり変わった。それを受け、富士山の景観という側面で取組むようになってきた。



2. 富士山景観の重要性

心に残る景観

－富士山がなぜ美しいか？景観は3段階に分けて考えた方が良いと言われている。

－右側に簡単なスケッチがある。丘の上に1本の木があり、背景に空が見えて雲が浮かんでいる。

そこに向かう道がある。これは簡単なスケッチだが、これはいい景観だと思うと過程する。この良さはまず「物的環境」として、丘があり、背景に青い空があり、雲が浮かんでいる。このスッキリした自然の風景そのものの景観がいいというである。2番目の象徴的環境とは、例えば丘の稜線がちょうど隣の町との境目になり、あそこから向こうは隣町、こちら側は自分の町。そこに峠の一本杉みたいな木がある。そうするとこの風景というのは、隣の町と自分の町との境界を象徴している景観でもある。3番目の意味的環境は結構重要。景観が印象的である大きな理由は、この意味的環境が相当左右している。ここが戦国時代の戦場だったところで、一本杉の下に武士のお墓があるなど、歴史的な場所であるというような意味が分かっていると、知らないとでは全然見え方が違う。この3段階が重なって、それぞれの人の中に印象的な景観を形作るということ。これはマンフレッド・シュパイデルさんというアーヘン工科大学の市民教授が、日本に来て、日本のいろいろな景観を解析する中で、「セマンティック ディファレンシャル」と言うが、意味的環境解析という手法で説明する。これは非常にわかりやすいと思った。こういう観点で富士山を見てみる。

①物的環境

－富士山の物的な環境景観として評価できるのはその存在感、独立峰である。それから裾野からてっぺんまで富士山という山体が独立して見え、その高さや大きさが普通ではないというところで、圧倒的な物的環境としての素晴らしいしさがある。

－ヨーロッパの色々な有名な建築物などは黄金比である。パルテノン宮殿などは黄金比に従った比率で作られ、人が見た時に非常にバランスのいい印象を与える。日本はそれよりもちょっと横幅が狭い。これを白銀比と言い、銀閣寺などがそういう比率になっている。数字で言うと、黄金比は1:1.618、白銀比は1:1.414。ちょうど三角形の45°の二等辺三角形の1:1:1.4、これが白銀比。富士山は山腹のどこまで取るかによるが、白銀比に相当すると言われている。

－もう一つ、私が思いついたことだが、ある角度からだが、富士山のこの曲線が美しいと思った。この曲線は、関数に当てはめてみると $y = ex^2$ 、関数の曲線にほぼぴったり。富士山が噴火して、溶岩が流れ、下る。溶岩の粘度、柔らかさ硬さによっていろんな形ができてしまうと思うが、富士山の場合は多分サラサラの溶岩で流れ落ちる時に流体力学に沿ったような、こういう曲線ができたのではないかと思う。これは全く自然のランダムな形というのではなく、自然が物理的な法則に即して作り出したある種の美しさがあると思う。

②象徴的環境

－富士山の素晴らしいしさを色々なスケールで、自分、個人、人、企業、自治体のエリアなどが象徴として活用するという関係があるということ。一番下の日本の象徴＝フジヤマなど、外国に日本を紹介する時に富士山は取り上げられている。つまり、富士山は日本の象徴という風に結び付けられている。静岡県でも「ふじのくに」と言っている。また、自治体でも富士市や富士宮市、実際の名称にも取り入れている。コミュニティでも例えば小学校とか学校の校歌に富士山が取り入れられているなど、やっぱり富士山の美しさとそれぞれのエリアや団体の理念として結び付けられているということで、象徴として活用されているという側面がある。

③意味的環境。

－中国人が日本に来た時には海越しの富士山を大変喜ぶことがある。写真も海越しの富士山をお見せすると、「それは非ください」と言われることが結構ある。なぜ海越しの富士山が中国の方から評価されるのか。2つ理由がある。

1)須弥山の思想。仏教の世界観は広い海の中に須弥山という山が屹立をしていて、それで世界が成り立っている。禅宗の龍安寺の石庭、石庭の中に石組みがある。まわりの砂の所の波目の模様は海。そこに石組みが置いてあるが、あれは海の中の島。中心になる一番大きなものが須弥山を表している。つまり、仏教の禅宗関係のお寺さんの庭は、仏教の世界観に基づくある種の空間を再現している。須弥山の一番てっぺんは有頂天という。周りの海の一番端っこが金輪（きんりん・こんりん）と言う。金輪際付き合わないと言う。要するに、この仏教の世界観の中で、もうこの世にいる限り付き合わないということ。一般の言葉にもなっている。中国は、そういった仏教の世界観が染み付いているところがあり、そういう見方がベースにあるではないか。

2)徐福伝説。2300年ぐらい前に、中国の秦の始皇帝が3000人の童男童女を海に出し、不老長寿の靈薬を探してこいと命じた。徐福を大将とする軍団が日本にたどり着いた。最終的には富士吉田に来たということで、富士吉田には徐福の祠やお墓がある。途中の和歌山県の新宮にも徐福の墓がある。他に日本海側にもあり、日本海側で言い伝えや伝説、墓のようなものが残っていることで、確からしい。東方の三神山には、海の中に蓬萊・方丈・瀛州（えいしゅう）という3つの山があり、そこに不老長寿の靈薬があるので、行って取ってこいと言われていた。蓬萊山は富士山で、日本でも昔から富士山の別名が蓬萊山と言われたりしている。そういう関わりが既に昔から意識されている。やはり中国の方が海越しの富士山を見た時に、徐福伝説がどこかに残っていて理想郷を見るという目で富士山は眺められるということだと思う。

－それ以外にも例えば須走の浅間神社は、まさに富士講の信仰の重要な拠点にもなっているが、それに呼応して江戸・東京の中では富士塚がたくさん作られていた。他に、大正時代になると、銭湯のペンキ絵でも富士山が取り入れられている。富士山のペンキ絵はお風呂屋さんの浴槽の向こう側に書かれている、近所の銭湯に行くが、実は富士山の世界に浸かる。あの海や浴槽は繋がっている。だから近所に風呂屋に行くが、実は富士山の世界に行き、そこに浸ることによって、心身がリフレッシュされる。そういうことで、この富士山のペンキ絵が銭湯に描かれている。だいたい西伊豆の土肥のちょっと南側ぐらいに行くと、ほぼこの風景が目に入る。やはり富士山というのは日本人の意識の中においても非常に特別なものである。

－文学や絵画、信仰など、それぞれにおいて富士山が捉えられ、芸術として表現されている。こういった積み重ねが、富士山を見た時の意味として我々の中に立ち上がっててくるということ。もちろん、個人的な意味もたくさんあると思うが、共通意識の中でこういうことがあるということ。

印象的な景観要素

－アメリカの都市計画のケビンリンチという方が、都市のイメージを書いている。我々が町を訪れた時に、住んでいる都市のイメージがどういう部分によって構成されているか？5つ要素がある。

①Pass(軸)。太い幹線道路や河川など線上の空間②Edge(縁)。周りの山並みの稜線や端の所。③Node(拠点)。軸の交わった所や主要な交差点、広場のこと。④District(地区)。一定の地区で雰囲気のあるところ。歴史的な地区、文教地区とか色々言う。⑤Landmark(地標)。大きなビル、公共施設、周辺の山。こういう5つの要素がその町のイメージを作る主要な要素になっていると言わわれている。ということは、こういう要素を意識して、そこがよかつたら保たれるようにするとか、

あるいは意図的にこういう様子を町の中に作り出していくというようなことが考えられる。

－そういったことを考えると、景観をよくするためにどんなことをしたらいいかは富士山を中心に色々考えられる。静岡県の景観形成ガイドプランでは、富士山地域について、右下にあるように①富士山の眺望を保全活用②山体の森林景観の保全。山体というのは、中腹の部分。中腹から裾野にかけて山そのものの環境景観を保存しましょう、ということ。③歴史的景観の保全。歴史資源を保存しましょう。④富士山景観の意識の醸成。大切にしようとか、そういうことのPRや協働の組織を整えましょう、ということ。これが県の景観計画の中の富士山にかかる方針である。

－小山町の景観計画。その中で色々な項目があるが、富士山の眺望景観を良くしよう、みたいなこともこの中に入っているということ。その眺望景観の中身の話になる。

3. 富士山の眺望景観について

視点場・眺望野・対象要素

－眺望を考える時、富士山の場合、対象要素は富士山。視点場、自分が今見る場所。例えばここだと浅間神社横の上の方の駐車場から富士山が見える。そこが視点場になる。そうすると視点場と対象要素の間に眺望野という領域がある。ここに電線や電柱などの余計なもの、富士山よりも目立つ色彩の看板など、阻害要素があるとよく見られなくなる。逆に対象要素と調和するような植栽や広場などがあるとよりよく見える。

視点場の整備

－これは静岡市の日本平で、富士山眺望が有名なところ。このように富士山の眺める場所で写真を撮ると、富士山そのものは遠くシルエットのような感じで美しく見える。その手前の清水の町や港は、少しガチャガチャしている感じがある。丘陵の緑の手前の展望する場所の柵や舗装、えんじの舗装や白いタイル舗装が富士山の眺望を楽しむ場所にしては色が目立ちすぎる。もう少し違う選択肢があるのではないか？

須走地区観光地エリア景観計画

－先ほどの小山町の景観計画に基づいて、須走地区の観光地エリア景観計画。須走地区でどういう景観の整備をしていくかというのが、このエリア景観計画という中にまとめられている。方針 1-2、「富士山の景観と富士山からの景観を楽しめる視点場づくり」ということで、眺望を良くしていくというようなことがここに記されている。参考図だが、眺望については右上の「周辺アクセスルートの富士山眺望点整備」のところで富士山の眺望について配慮していこうという事になっている。そのほか、観光地としての整備内容が示されている。こういった計画に基づいて、順次整備が進められている。

眺望野の確保

－眺望の保全について。参考までにこれは鹿児島。向こうに見えているのが桜島。今写真を撮っているこの場所は、城山というところで、西南戦争の最後に西郷隆盛が立てこもり、結局官軍に攻めたてられて自決をした場所。この場所から、隆盛も桜島を最後に眺めたであろうし、いわゆる薩摩隼人の心の風景になっている。鹿児島市では、この場所から桜島の景観眺望を保存するために、建物の高さの規制、色彩の規制を中心市街地のかなり広範囲にわたりやっている。この写真を見ると、ベージュ系の色が多い。青や真っ赤、真っ黄色などの建物はない。こういうことによって、最後西郷隆盛の見たであろう、あるいは鹿児島の人たちが心の風景として大切にしたい眺望というものが保たれている。

—またそれと対比していいような場所だが、会津若松の飯盛山から鶴ヶ城を見たところ。最後に白虎隊が立てこもったところで、鶴ヶ城が焼けているのでもうここまでだ。そこでみんな自決してしまった。そこからの眺望。白虎隊のお墓がある。ここはまさに自決した場所なので、そこから鶴ヶ城を白虎隊の皆さんが見ていたところだが、その前にNHKの電波塔みたいなものが建っている。お城のちょうど真ん前。やめたほうがいいのではないかと思った。これは1本の棒だからいいが、ここに例えば20階建てぐらいのマンションができると、見えなくなる。鹿児島は高さの規制などをしているが、ここは何もやっていない。だから、会津の人たちにとって心の風景の一番大切な物が保たれる状況にはなっていない。景観というのは、これは大切にしないといけない、これは保っていくものなど、その良さをはっきり把握した上でそれを保つ対策をやってかないと、いつの間にかなくなってしまう。そういう点を須走でも意識して対応していくべきだと思う。

—須走の浅間神社の駐車場の下のところから富士山方面を見た写真だが、電線がたくさんある。今はなくなっている。登山道入り口越しに富士山を見ている写真。ここも電線がたくさんあったが、今はなくなっている。眺望点から見た富士山の眺望野の阻害要素が1つなくなっているということ。
—山体の保全。富士山の中腹から裾野にかけて保存を考えていかないといけないという事。富士市の方では「富士・愛鷹山麓地域環境管理計画」ということで、一定の開発のコントロールがされている。山体を守るという事。

—もっと徹底してやっているのが、アメリカのコロラド州にアスペンというスキーリゾートで有名な街がある。ここは徹底した景観コントロールをやっていて、8040グリーンラインという山の8040ftより上には建物を作らせないという規制。建物はほとんどないが、その結果、冬の景色で街の中からこの山を見た時にすごく印象的に見える。秋もそう。この町でどういう景観や土地利用のコントロールをしているか。「アスペンランドユースレギュレーション」、アスペン土地利用条例というもので、かなり細かな詳細ゾーニングをして、そのゾーンごとに住宅地区、商業地区ごとに建物はこういう建て方にしましょう、こういう色彩はやめましょう、などの細かいルールが決まっている。また、開発を行うときにポイント制で、その良し悪しを判断するのが非常に分かりやすくなつた。色々な規制や守るべきルールがあるが、それを判断できる仕組みが整っている。その結果、良い雰囲気が保たれ、リゾート地としての価値がすごく高まっている。アメリカの国内での非常にイメージの高い、セレブが住みたがるような場所になっている。これにより、環境の価値が高まっている。

4. 景観まちづくり

(1) 阻害要素の縮減・修景

—須走富士浅間神社交差点のローソンの前のガードレール。白で目立ったが、地域の住民で塗り替えた部分があり、よくなつた。

—これは富士宮市の朝霧で、地域づくりサポートネットが関わり、看板の撤去ができた。酪農推進の看板が139号線沿いの牧場側に入る所にあり、写真を撮るのにすごくいい場所だが、看板が邪魔だった。富士山を一番楽しむため、この看板はここじゃなくてもいい。

—ゴミ捨てをやめようという市の環境課が作った看板。これも富士山眺望を阻害するのでやめていた。この139号沿いの道路沿道で40本ぐらいは、看板の撤去、集約化をした。朝霧で5箇所ぐらいあったこれと同じような看板がこういう格好で集約されている。地道な活動だが、積み重ねられていくことにより、いい眺望が得られたり、保たれる。逆に看板が乱立してしまうと、いい眺望を損なわれるということになる。

—これは自販機。最近結構増えてきた。外側は焦げ茶色で、環境配慮型の自販機と言われている。

—これは、白糸の滝駐車場。この管理を地元の団体でやっているので、駐車場内の交通安全に気を遣うばかり赤いパイロンがたくさん立っている。また、これは修景上の配慮だと思うが、木製のフラー・ポットがたくさん置かれているが、駐車場に停めて白糸の滝に行く前に、まず富士山がすごくよく見えるところ。この状況が今すごく改善された。電線、電柱がなくなったのと、こういったパイロンも置かない配慮もしている。

(2) 公共施設の修景

—これは新富士駅の北口。出たところでこのような風景が見える。今はもうなくなったが、マツダレンタカーの看板。赤色で結構大きな看板が立っていた。もう1つ、今はなくなったが、かぐや姫のあの人形が上でぐるぐる回るというモニュメント。これは、富士のロータリークラブさんが作られたもの。これも広場の中で目立つ。富士に来た方が最初に目にする風景はやはり富士山だと思うので、そこに人形を塔の上に乗せてぐるぐる回すことないのではないか？というのが富士市の景観審議会で話題になった。結果、ロータリークラブの方々にも理解いただき、撤去されて今なくなった。マツダレンタカーの看板もなくなり、低い看板になった。だいぶ状況を改善された。

—これは富士市。これは全然改善されていないが、東芝さんのエレベーターの検査塔みたいなもの。新富士駅から街中に行く田子浦伝法線という都市計画道路、幹線道路。実は静岡県内でも新たに作られる道路で、「山あて」と言うが、富士山を目指して道路の線形が作られている。ここは何本かある1つだが、残念なことにやっぱり周りのこういう構造物、高圧線、煙突がせっかくの眺望を阻害している。

—これは沼津。御用邸に行く道路。通称「八間道路」と言って、天皇陛下がかつて御用邸に行き来した時に整備された道路だが、富士山がほぼ正面に見られるが、ここはもう周りに電線・電柱、商業施設の看板で富士山の眺望が台無しになっているところ。ここを何とかしたいが、こうなるとなかなか簡単にはできない。課題ではある。

—三保街道。清水の折戸というところから、三保半島に向かう道路で、ここも富士山が真正面に見えるところ。山あての道路として整備されているが、ここも電線・電柱がたくさんあった。三保の松原のところも世界遺産登録になったので、ここについては横断する線だけは無くした。だいぶすっきりと見えるようになった。

—これは熊本空港。熊本空港を降りて、熊本市内に行くアクセス道路。ここは熊本県の前県知事の細川さんの時代に、空港とこの取り付け道路が整備されることについて、かなりきっちりとした景観計画を作つて地区指定をしている。だから結構長い区間だが、看板が1個もない。飛行機で熊本に行って、そこでバスとか車に乗り換えて、熊本の市内に向かう時に、阿蘇山の山並みがすごく印象的に見える。火の国に来たな、みたいな感じがするところ。

—これは旧東ドイツだが、一般の地方道。日本で言えば昔の2級国道みたいな一般的な道路。ドイツの場合はここだけでなく、ほとんど周りに野立ての看板がない。熊本ではあのような形で徹底してやっているが、こういう風な状況であると、本当にそれぞれの地域が印象的に見える。地域そのままの姿が非常に心に入ってくるというようなことがある。

—間に余計なものがないと一言で言うと、富士山を眺める場所として、東名高速道路の富士川サービスエリアのスタバのコーヒーハウス横の所。あそこは高台から富士山を眺める間に余計なものがほとんど見えないので、すごく印象的な良い場所。

—これは富士市の中央公園。公園の中に富士山の眺望が取り入れられている。

(3) 大規模建造物の規制誘導

- これは富士市の景観審議会で議論したが、見本市会場が富士山メッセという形ができる時に、やはりここからの富士山の眺めを大切にしたいということで、入り口から見た時に建物から富士山の上の方がちゃんと見えるようにしようということ。形としても富士山の形を邪魔しないように緩やかな円形。色も乳白色みたいな色で富士山の眺望をなるべく阻害しないように配慮してあの建物が作られている。これは景観審議会でもだいぶ議論させてもらった。
- 煙突も富士市にはたくさんあるが、煙突をやめたり、やめられないものは色を変えたり、そういうことも行われている。

(4) 街並み景観の形成

- 富士宮市、これは街中の町並み。富士宮の浅間神社に行く商店街通り。ここも景観重点地区ということで、建物の色彩を落ち着いた色にするとか、建物の高さや形状についても一定のルールを作つて、それに沿って建物を建ててもらっている。
- 参考までに、ここは九州の知覧という武家屋敷。江戸時代に作られた街並みだが、今みたいな余計なものが全然ないので、石積みと生垣、家の中の植栽、門、周りの山並みなど個性的だが印象的な気持ちのいい景観が作られている。ただ一点、この道路の舗装は人工物だが、舗装もほとんど目立たないような、かなり神経を使った舗装の仕方をされている。だから雨の時も美しい。
- 協働による二次管理活用では、景観を良くしたり、いい景観を保ったりする時に、行政だけではなく、地域の方々との協力関係が大切である。道路については、ボランティアサポートプログラム、アダプトロードプログラム、道路協力団体制度など、道路管理者と地域の住民が協力する仕組みができている。こういった仕組みを上手く活用する。特に須走の場合は既に10年近い実績があるので、それを基に協働の仕組みを取り入れられるといい。色々な側面で協働の景観が考えられるが、道路だけでなくポイントに関して、実施できるといい。

(5) 協働施策の推進

- 須走の活動の一端、歩道橋で花の会が緑地帯の花壇の手入れをしている。あざみラインのガードレールの塗り替えを子供達も一緒にしている。地道な活動だが、先ほど言ったように積み重なってきており、その上で電線の地中化事業、ガードレールを取り替えるなど、昨年から今年にかけて、特にオリンピックのロードレースがあったので、それに向けて籠坂峠から下ってくる道についてもだいぶ修景が行われた。10年ぐらい前と比べると、本当に見違えるような状況にはなっている。
- Q. 街並みを整備、景観と言うと、全国に似たような整備をする。例えば、宿場町では江戸時代のセットのように道路を綺麗にし、灯籠を作り、インターロッキングで舗装をして…、というようなところが全国に多かったが、地域ならではの景観の醸成ができるのか？
A. 昔からの街並みや建物の作り方はそれぞれの地域で異なっている。古い町屋とか民家にしてもそれぞれ地域の特徴がある。当然だが、昔の建物は周りの山ぼ木を切って、地域の大工さんが石や地域の材料を使って作っているので、地域の特徴が出ることがまず基本にある。それを把握した上で、新しい建物のルールに適用していくということがあれば、画一的なことにはならないだろう。周りに特徴ある眺望や山並み、海辺、川があり、周りの景色とうまく取り込むということも大切なこと。その結果、それぞれの地域らしい景観が保たれ、それをベースによりいい景観を作れると思う。ちゃんと地域のスタディをするというのが基本。
- Q. 昔はこんなに木は多くはなかった。富士山の周りももっと木は切られていた。いい場所だが、

木が育ちすぎて、富士山が良く見えない。三坂など景観がいいところでは木を切ったりしているように思う。自然環境の保護と景観という面から見た時、どういうように対応しているのか？

A. 眺望のいい場所の眺望を保つためにその周辺の木は伐採するのもあると思う。その周辺の樹林や森が自然環境として非常に重要な場所だったり、重要な樹木だったりすれば別だが、例えば伊豆スカイライン、熱海の十国峠からずっと南に来るところ。あそこは、要所々の眺望のいい場所に駐車場があり、眺望点が作られているが、やはり放っておいたら周りの木が高くなり、全然眺望が見えなくなつたので、50周年の記念事業とオリンピックのこともあり修景伐採というのをやつた。そういうのはアリだと思う。要所々でということと、周辺の自然関係に配慮しつつ、いい眺望を保つためにはそれを保つ植栽管理が必要だという風に思う。

－静岡県で間伐事業を積極的に進めている。小山町でも富士山の眺望を良くする事業を進めている。

－神社の本殿の後ろに富士山が見えるのが須走の浅間神社だが、木が鬱蒼として見えにくいで多少を除伐した。昔の人が考えた構造、元々の浅間神社の役割を、私たちが知らないと、この木はダメ、この木はアリだ、の意見の釀成ができない。何が必要で、何が必要じゃないのかを住人が判断しないといけない時代になっている。